

委託事業実施内容報告書

平成26年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 【地域日本語教育実践プログラム(B)】

受託団体名 群馬大学

1. 事業名称

日本に定住を希望する外国人住民が高齢期に向けて備えるための日本語教育支援事業
ー外国人住民の文化的・社会的多様性に配慮した日本語教育プログラムの構築ー

2. 事業の目的

日本に定住を希望する外国人住民が高齢期に備えられるよう、学習者の文化的・社会的多様性に配慮した日本語教育プログラムを構築する。プログラムの構築にあたって、社会福祉、保健、介護、金融、企業等の関係者にその企画・実践の協力を得て、日本での高齢期に備える定住外国人を、産官学民が一体となって、「わかりやすく・伝わりやすい日本語」で支援する。

3. 事業内容の概要

平成25年度にプログラム(A)として本学で開発した外国人住民向けの、日本での高齢期に備えるためのライフプラン教材を精選し、外国人住民の文化的・社会的多様性に配慮した教材・指導書を再構築する。この教材・指導書を活用する指導者を養成し、日本語教室を開く。開発した日本語教育プログラムの効果検証を行い、シンポジウムで公表し関係者と共に意見交換をする。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成26年10月3日 15:00～17:00	2時間	群馬大学 荒牧キャンパス 大学会館1階 学務部会議室	井田智則(群馬県), 吉田桂子(太田市), 糸井昌信・坂本裕美(地域日本語教室指導者代表), 牧原功・俵山雄司・山口和美・結城恵(群馬大学)	1.出席者紹介 2.委員長選出 3.日本語教室について これまでの経緯・内容・目的等の説明	1.運営委員の自己紹介 2.運営委員会設置要綱を承認。委員長には、群馬大学教授結城恵を選出。 3.昨年度の日本語教室を振り返り、本年度の取り組み内容や及び日程案について説明し、委員会で検討。
2	平成27年2月23日 15:00～17:00	2時間	群馬大学 荒牧キャンパス 国際教育・研究センター会議室	服部芳幸(群馬県), 吉田桂子(太田市), 糸井昌信・坂本裕美, 綿貫通啓, (地域日本語教室指導者代表), 牧原功・俵山雄司・山口和美・結城恵(群馬大学)	1.日本語指導者養成講座及び日本語教室の進捗状況について 2.成果と課題について 3.来年度の予定について	1.日本語指導者養成講座及び日本語教室について、授業内容や参加人数などを報告した。 2.日本語教室の実施報告とともに他の団体依頼により成果発表を行い、課題について意見交換を実施した。 3.来年度の予定について事業の改善点などについて協議した。

5. 取組についての報告

○取組1:学習教材の検討会議の開催

- (1) 体制整備に向けた取組の目標
 (2) 取組内容
 (3) 対象者
 (4) 参加者の総数 16人
 出身・国籍別内訳

中国	人	インドネシア	人
韓国	人	タイ	人
ブラジル	2人	ペルー	1人
ベトナム	人	フィリピン	人
ネパール	人	日本	13人

- (5) 開催時間数(回数) 13時間 (全 9回)

- (6) 取組の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	内容	参加者
1	平成26年6月15日 10:00～12:00	2時間	群馬大学 太田キャンパス	7人	ブラジル(1人), ペルー(1人), 日本(5人)	学習者のニーズ調査の実施と学習テーマの検討	太田市在住のブラジル人住民(6人)を招いて、高齢期のとらえ方と備えに関するニーズ調査を実施し、学習テーマの検討を行った。	結城恵、山口和美、大谷明、ハシヅメエデル、友成佐智子、増田英幸、平田カティア(7人)
2	平成26年6月28日 10:00～12:00	2時間	群馬大学 太田キャンパス	7人	ブラジル(1人), ペルー(1人), 日本(5人)	学習者のニーズ調査の実施と学習テーマの検討	太田市在住のペルー人住民(5人)を招いて、高齢期のとらえ方と備えに関するニーズ調査を実施し、学習テーマの検討を行った。	結城恵、山口和美、大谷明、ハシヅメエデル、友成佐智子、増田英幸、平田カティア(7人)
3	平成27年2月8日 16:00～17:00	1時間	群馬大学 太田キャンパス	14人	ブラジル(1人), ペルー(1人), 日本(12人)	学習教材「KENKOU」の検討	平成26年度に実施した日本語教室「KENKOU」の学習教材の点検・加筆・修正	結城恵、山口和美、糸井昌信、糸井和子、横山典子、佐藤友美恵、松岡純子、大谷明、坂本裕美、綿貫通啓、小林あけみ、正田江利子、増田英幸、平田カティア(14人)

4	平成27年2月20日 13:00～17:00	4時間	(文化庁) 大阪 国立民族学博物館	1人	日本 (1人)	外国人学習者の出身国の生活文化と価値に関する調査	日本語教育事業で開発する学習教材作成のための調査を行った。	結城恵(1人)
5	平成27年2月20日 19:00～21:00	2時間	群馬大学 荒牧キャンパス	3人	ブラジル(1人), ペルー(1人)	学習教材「KAIGO」の検討	平成26年度に実施した日本語教室「KAIGO」の学習教材の点検・加筆・修正	山口和美、坂本裕美、平田カティア(3人)
6	平成27年2月21日 10:00～12:00 13:00～16:00	5時間	(文化庁) 大阪 国立民族学博物館	1人	日本 (1人)	外国人学習者の出身国の生活文化と価値に関する調査	日本語教育事業で開発する学習教材作成のための調査を行った。	結城恵(1人)
7	平成27年2月23日 19:00～21:00	2時間	群馬大学 荒牧キャンパス	8人	ブラジル(1人), ペルー(1人), 日本(6人)	学習教材「NENKIN」の検討	平成26年度に実施した日本語教室「NENKIN」の学習教材の点検・加筆・修正	結城恵、山口和美、大谷明、坂本裕美、綿貫通啓、小林あけみ、正田江利子、平田カティア(8人)
8	平成27年2月24日 13:00～15:00	2時間	東京大学	3人	日本 (2人)	学習教材「BOUSAI」の検討	平成26年度に実施した日本語教室「BOUSAI」の学習教材の点検・加筆・修正	結城恵、松岡純子、田島志保(3人)
9	平成27年2月27日 19:00～21:00	2時間	群馬大学 荒牧キャンパス	4人	ペルー(1人), 日本(3人)	学習教材「年をとる」の検討	平成26年度に実施した日本語教室「年をとる」の学習教材の点検・加筆・修正	山口和美、坂本裕美、松岡純子、平田カティア(4人)

(7) 参加者の募集方法

第1回・2回は、本事業の地域日本語教室指導者のリーダーとなる(群馬大学・群馬県「多文化共生推進士」養成ユニット履修生)を中心にスタートし、第3回以降は、地域(太田市・伊勢崎市・大泉町)からの地域日本語教室参加者も交えて行った。第5, 7, 8, 9回は地域日本語教室指導者が担当テーマ別に別れて検討会を開いた。第4, 6回は2月8日の教室で学習者側が提供した活動を学習教材化するために必要な文化情報を収集するために必要となり、企画運営責任者が出張した。

(8) 特徴的な活動風景(2～3回分)



【6月15日】

ブラジル人人住民を対象に

高齢期への見方・考え方

日本で高齢期を過ごす場合、どのようなことを不安に感じたり、知りたいと考えるのかをヒアリングした。その結果をもとに教材を精選した。



【6月28日】

ペルー人住民を対象に

高齢期への見方・考え方

日本で高齢期を過ごす場合、どのようなことを不安に感じたり、知りたいと考えるのかをヒアリングした。その結果をもとに教材を精選した。

(9) 取組の目標の達成状況・成果

教材内容については、平成25年度の当事業を担当した地域日本語教室指導者リーダーたちとの話し合いでは、10テーマ抽出したが(仮説)、実際に外国人住民にヒアリングをしたところ、防災・健康・年金・介護・お金・地域交流の6つのテーマに絞られた(検証)。それぞれに学習教材を作成し実践を実施したが(仮説)、授業実践後のふりかえりと学習者の感想に基づき、学習教材の内容を調整した(検証)。さらに、当事業では、当初は想定していなかった学習者からの提案による学習者サイドからの文化パフォーマンスが提示されたという成果を得た、その内容を地域日本語教室で組み込む上で必要な事項の検討を行った(検証→仮説の構築→次年度以降の検証へ)。

(10) 改善点について

外国人学習者にヒアリングを重ね、学習教材の妥当性を高めることは不可欠な作業であることを再認識させられた。本年度はこうした作業に比較的時間をかけて取り組むことができた。振り返ってみて、地域日本語教室のスタートをもう少し早めれば、実施期間の中間段階で、外国人学習者とともに学習内容を振り返ってもらう時間をとることが可能になると思う。次年度以降、さっそく、この案を検討し実施できるようにしたい。

○取組2:指導者養成講座

(1) 体制整備に向けた取組の目標

(2) 取組内容

(3) 対象者

(4) 参加者の総数 25名

出身・国籍別内訳

中国	人	インドネシア	人
韓国	人	タイ	人
ブラジル	2人	ペルー	1人
ベトナム	人	フィリピン	人
ネパール	人	日本	22人

(5) 開催時間数(回数) 51時間 (全 13回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	内容	講師等氏名	補助者氏名
1	平成26年7月6日 10:00~17:15	6時間	群馬大学 荒牧キャンパス	11人	ブラジル(2人), ペルー(1人), 日本(8人)	地域日本語教室及び標準的なカリキュラム(案)の基本事項の理解と外国人住民ニーズの理解	・「外国人住民が高齢期に向けて備えるための日本語教育事業」の概要説明 ・外国人住民ニーズ調査の分析 ・日本語教室の構成について ・講義テーマの設定について	結城 恵	山口 和美
2	平成26年7月27日 10:00~17:15	6時間	群馬大学 荒牧キャンパス	18人	ブラジル(2人), ペルー(1人), 日本(15人)	講義テーマの検討	・講義テーマの設定について テーマは5項目防災、元気、お金・年金、介護、地域交流とすることで、各自の講義案について意見交換	結城 恵	山口 和美
3	平成26年8月3日 10:00~17:15	6時間	群馬大学 荒牧キャンパス	16人	ブラジル(1人), ペルー(1人), 日本(14人)	テーマ別内容検討	・講義テーマについてのグループ別意見交換 ・ライフイベントに関連する制度についての説明(日本、ブラジル、ペルー)	結城 恵	山口 和美
4	平成26年8月31日 10:00~17:15	6時間	群馬大学 荒牧キャンパス	16人	ブラジル(2人), ペルー(1人), 日本(13人)	テーマ別内容検討	各テーマごとに、指導計画、活動内容、教材について検討、作成を行う。	結城 恵	山口 和美

5	平成26年9月10日 19:00～21:00	2時間	群馬大学 荒牧キャンパス	11人	ブラジル(1人),ペルー(1人),日本(9人)	テーマ別 進行イメージ検討	各テーマごとに、指導計画、活動内容、教材について検討、作成を行う。	結城 恵	山口 和美
6	平成26年9月22日 19:00～21:00	2時間	群馬大学 荒牧キャンパス	13人	ブラジル(2人),ペルー(1人),日本(10人)	指導計画書の書き方	指導計画書の基本理念と書き方の学習	結城 恵	山口 和美
7	平成26年10月5日 10:00～17:15	6時間	群馬大学 荒牧キャンパス	12人	ブラジル(1人),ペルー(1人),日本(10人)	テーマ別 指導計画書の作成	各テーマごとに指導計画書を作成し、活動内容、教材、進行について再検討を行う。	牧原功 俵山雄司	山口 和美
8	平成26年10月11日 13:00～17:00	4時間	群馬大学 太田キャンパス	16人	ブラジル(1人),ペルー(1人),日本(14人)	講義シミュレーションと指導計画書の再点検	・講義テーマ「防災」についての指導計画、講義内容の検討、作成	結城 恵	山口 和美
9	平成26年11月16日 9:30～12:00 16:15～16:45	3時間	群馬大学 太田キャンパス	15人	ブラジル(1人),ペルー(1人),日本(13人)	講義実施 事前事後の検討	・講義テーマ「年金」についての講義内容の検討、見直し ・講義内容の振り返り	渡部真 由美	結城 恵
10	平成26年12月14日 9:30～12:00 16:15～16:45	3時間	群馬大学 太田キャンパス	12人	ブラジル(1人),ペルー(1人),日本(10人)		・講義テーマ「介護」の講義内容の検討、見直し ・講義内容の振り返り	俵山雄司	結城 恵
11	平成27年1月11日 9:30～12:00 16:15～16:45	3時間	群馬大学 太田キャンパス	14人	ブラジル(1人),ペルー(1人),日本(12人)		・講義テーマ「介護」の講義内容の検討、見直し ・講義内容の振り返り	結城 恵	山口 和美
12	平成27年1月25日 9:30～12:00 16:15～16:45	3時間	群馬大学 太田キャンパス	16人	ブラジル(1人),ペルー(1人),日本(14人)		・講義テーマ「お金」の講義内容の検討、見直し ・講義内容の振り返り	大和 啓子	結城 恵
13	平成27年2月8日 11:00～12:00	1時間	群馬大学 太田キャンパス	16人	ブラジル(1人),ペルー(1人),日本(14人)	振り返りと成果発表の検討	・これまでの教室の振り返り ・シンポジウムの打ち合わせ等	大和 啓子	結城 恵

(7) 参加者の募集方法

受講生は一般公募せずに、地域の日本語教育の関係者、これまでに群馬大学が行った養成講座の受講生や多文化共生プロジェクトの参加者等を個々に募った。その理由は、本事業をモデル事業として成立させるために、教室指導者の力が重要であり、そのためには、指導者となる養成講座受講生の能力や置かれている状況等を把握していることが必要であるため。

(8) 特徴的な授業風景(3回分)



【7月6日】

今回の日本語教室の概要説明を行うとともに、地域日本語教室における目的、目標や指導の方法等について指導者間での考え方、意識を共有することが必要と考え、文化庁で作成している「活用のためのガイドブック」を教材にして、受講者全員で学習した。



【8月3日】

高齢期に備える日本語教室の基本知識として、日本の制度だけでなく、受講者の国の制度等の知識が必要と考え、日本、ブラジル、ペルーの「ライフイベントに関連する制度」について学習した。



【10月11日】

講義を円滑に進めると共に、指導者全員で講義内容や教室運営について共有するために、指導計画書を毎回作成することとし、活動の目的や内容、方法、留意点などについて議論しながら進めた。

(10) 目標の達成状況・成果

○ 講座の初めに、「カリキュラム案の活用及び指導のポイント」について、繰り返し皆で読み込み、議論しながら習得したことによって、行動、体験中心の活動や指導者と学習者の立場を超えて互いに学び合うことのできる日本語教室を目指すことを皆が認識し、共有できた。

○ 日本語教室を進めるにあたって、指導内容ごとに担当制としたが、綿密な指導計画書を作成することによって、当日の具体的な講座内容、運営方法が全員に理解でき、担当でない指導者であっても講義に積極的に関わることができた。

○ 様々な専門性や職業を持ち、また年齢も幅広い指導者が互いに知識や経験を教え合い、学びあうことによって、「高齢期を迎える」という難しいテーマに取り組むことができた。

(11) 改善点について

体験・行動中心の教室の場合には、指導者だけでなく、外部機関や外部講師との連携が不可欠であり、計画的な調整を行う必要がある。

取組3 日本語教室の開催

- (1) 体制整備に向けた取組の目標
 (2) 取組内容
 (3) 対象者
 (4) 参加者の総数 28人
 出身・国籍別内訳

中国	2人	インドネシア	人	
韓国	人	タイ	人	ボリビア 2人
ブラジル	17人	ペルー	3人	フランス 1人
ベトナム	3人	フィリピン	人	
ネパール	人	日本	人	

- (5) 開催時間数(回数) 65 時間 (全 8回)

- (6) 取組の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	内容	講師等氏名
1	平成26年10月19日 9:30～16:30	7 時間 x2 回	群馬大学 太田キャンパス・ 太田市中央消防署	受講者20人	中国(2人), ブラジル(13人), ペルー(2人), ボリビア(2人), フランス(1人)	防災	・「緊急」「避難所」など防災に関する日本語の学習、意味の理解、緊急カードの作成 ・非常食を経験する ・消防署における救命方法等の訓練	糸井昌信, 糸井和子, 佐藤友美恵, 横山典子, 松岡純子, 田島志保, 増田秀樹, 綿貫通啓, 坂本裕美, 小林あけみ, 正田江利子, 結城恵, 山口和美, 増田英幸, 藤井祐樹, 平田カティア
2	平成26年11月2日 9:30～16:30	7 時間 x2 回	太田市九合行政センター	14人	ブラジル(10人), ペルー(2人), ボリビア(1人), ベトナム(1人)	健康	・「健康」に関する意見交換→「生活習慣病」についての学習 ・料理実習 減塩、野菜の摂取の学習 ・食事のマナーについての学習 ・健康づくりのための運動ストレッチやウォーキングを学ぶ…体の動かし方、歩き方の基本を学ぶ、必要な日本語を取得する	糸井昌信, 糸井和子, 佐藤友美恵, 佐藤工祐, 横山典子, 松岡純子, 田島志保, 浦澤みさき, 増田秀樹, 大谷明, 綿貫通啓, 坂本裕美, 小林あけみ, 正田江利子, 結城恵, 山口和美, 友成佐智子, 増田英幸, 藤井祐樹, 平田カティア

3	平成26年11月16日 13:00～16:00	3時間 x2回	群馬大学 太田キャンパス	19人	中国(1人), ブラジル(13人), ペルー(1人), ボリビア(2人), ベトナム(2人)	年金	・日本の年金制度について学ぶ…年金の仕組み、利用のしかたを学ぶ、ねんきん定期便により、自分の年金の状況を理解する ・年金に関する必要な言葉を学ぶ	横山典子, 松岡純子, 田島志保, 浦澤みさき, 増田秀樹, 大谷明, 園田基博, 坂本裕美, 小林あけみ, 正田江利子, 結城恵, 山口和美, 友成佐智子, 増田英幸, 藤井祐樹, 平田カティア
4	平成26年11月30日 9:00～18:00	9時間	みなかみ町 猿ヶ京温泉地区	13人	中国(1人), ブラジル(9人), ボリビア(1人), ベトナム(2人)	交流	・コミュニケーション日本語の学習 ・茶道の基礎知識の学習 ・挨拶の練習 ・交流会…ウエルカムセレモニー、日本の伝統文化を体験する(茶道、餅つき、そば打ち)、地域の文化を体験する(民話の語り、太鼓、紙芝居) これらの体験を通して地元の人々(フィリピン定住者を含む)と交流する	糸井昌信, 糸井和子, 佐藤友美恵, 佐藤工祐, 横山典子, 松岡純子, 浦澤みさき, 増田秀樹, 坂本裕美, 小林あけみ, 正田江利子, 結城恵, 山口和美, 友成佐智子, 増田英幸, 藤井祐樹, 平田カティア
5	平成26年12月14日 13:00～16:00	3時間 x2回	群馬大学 太田キャンパス	11人	中国(1人), ブラジル(9人), ボリビア(1人)	介護	・年をとった時の気持ちや体の状態を理解する…各自の経験について述べる、介護体験キットにより疑似体験する、体験後に老後の生活について意見交換する ・老後の生活に必要な日本語を学習する	糸井和子, 横山典子, 松岡純子, 田島志保, 増田秀樹, 綿貫通啓, 坂本裕美, 小林あけみ, 結城恵, 友成佐智子, 増田英幸, 平田カティア

6	平成27年1月11日 13:00～16:00	3時間 x2回	群馬大学 太田キャンパス	13人	ブラジル(8人), ペルー(1人), ボリビア(1人), ベトナム(3人)	老後の生活	・「年をとった時の生活」と「お年寄りを支える」を考える・・・前回の学習経験を振り返りながら、年をとることについて意見交換する。「支え合う」ことについて考える。日本語の復習。	糸井昌信, 糸井和子, 横山典子, 田島志保, 園田基博, 綿貫通啓, 坂本裕美, 小林あけみ, 正田江利子, 結城恵, 山口和美, 友成佐智子, 増田英幸, 平田カティア
7	平成27年1月25日 13:00～16:00	3時間 x2回	群馬大学 太田キャンパス	13人	ブラジル(9人), ペルー(1人), ボリビア(1人), ベトナム(2人)	お金・振り返り	・年をとった時のお金について考える・・・老後のお金についての意見交換を通して、自分の生活を考える。 ・防災、健康、年金、介護の各活動の振り返り・・・必要な日本語の復習	糸井昌信, 糸井和子, 佐藤友美恵, 松岡純子, 田島志保, 浦澤みさき, 大谷明, 小林修, 綿貫通啓, 坂本裕美, 小林あけみ, 正田江利子, 結城恵, 山口和美, 友成佐智子, 藤井祐樹, 平田カティア
8	平成27年2月8日 12:00～16:00	4時間	群馬大学 太田キャンパス	17人	中国(1人), ブラジル(11人), ペルー(1人), ボリビア(1人), ベトナム(3人)	交流・修了式	・各国の文化や料理紹介 ・日本語教室振り返り(受講者による教室、指導内容の再現劇の実施等) ・修了式	糸井昌信, 糸井和子, 佐藤友美恵, 横山典子, 松岡純子, 田島志保, 浦澤みさき, 増田秀樹, 大谷明, 綿貫通啓, 坂本裕美, 小林あけみ, 正田江利子, 結城恵, 山口和美, 増田英幸, 藤井祐樹, 平田カティア

(7) 参加者の募集方法

日本語教室開催のチラシ(添付のチラシ)を作成し、以下の機関や団体に設置／配布を依頼した。

- ・指導者養成講座受講生及び群馬大学多文化共生プロジェクト関係者に周知を依頼
- ・市内公立小学校(外国人集住地域)の外国人保護者に周知
- ・太田市役所交流推進課に市内関係団体、関係者に周知依頼

(8) 特徴的な授業風景(2～3回分)

○ 10月19日「防災」

日本語教室報告書	
授業日	2014年10月19日
授業テーマ	第1回 BOUSAI
授業の目標	緊急時に迷わずに行動できるように備える(逃げることと助けること)
指導項目と内容	【授業の形態】 ・担当指導者による「防災」の概念や言葉の学習、活動(グループ別の学習で、各グループには指導者がつき、個別に教えた。通訳も配置。) ・消防署での体験学習 【授業の内容】 1. 「緊急」の意味、言葉を学ぶ ・「緊急」という用語について説明。カード、絵、緊急地震速報を用いる。 ・緊急時の避難の必要性を説明する 2. 緊急時の避難について学ぶ ・受講生自身の住所と避難所を地図で確認する。 3. 緊急カードを作成する ・氏名、住所、血液型など緊急時に使えるカードを作成する。 4. 消防署について学ぶ ・体験学習を行う「消防署」についての基礎知識を学ぶ。 ・119番のかけ方を学ぶ 5. 非常食を体験する 6. 消防署で救命方法(助ける)を学ぶ ・救命の基礎について講義を受ける ・AEDの使い方の講習を受ける ・その他人工呼吸の方法、のどにものを詰まらせた時の処置を学ぶ ・消防署内の見学 7. ふりかえり ・感想を発表する。
備考 講師感想など	・第1回目の日本語教室で、指導者、受講生ともにはじめは緊張していたが、行動中心の内容になってくるにつれて、和んできた。 ・学習者の日本語能力について、講義の状況を見ながら評価した。日本語でわからない場合は、通訳者をおいて、講義内容を理解させるように努めた。 ・通常の日本語教室と異なり、ひらがなや文法の学習ではなく、生活に直結した日本語の学習であることを受講生は理解し、期待を寄せていた。



○ 11月16日 「年金」

日本語教室報告書	
授業日	2014年11月16日
授業テーマ	第3回 NENKIN
授業の目標	・ 日本での老後に備える年金制度について関心を持ってもらう。
指導項目と内容	【授業の形態】 ・ 担当指導者による「年金」のしくみや制度、言葉の学習、活動（グループ別の学習で、各グループには指導者がつき、個別に教えた。通訳も配置。） ・ 専門家としてファイナンシャル・プランナーの指導も行う 【授業の内容】 1. 導入 ・ 年をとった時のお金について考える 受講生同士で話し合い、発表させる。母国の状況についても触れてもらう。 ・ 年をとった時の生活基盤となる資金として、年金に着目する。 2. 年金の仕組みを知る ・ スライドで年金の仕組みを説明する。 年金に加入した場合、未加入の場合のフローチャートにより、年金の仕組み、自分の状況を 知る。未加入の場合、一部未払いの場合等の例もあげて、市役所等に相談、申請すること も 伝える。 3 年金定期便を学ぶ(FPによる講義) ・ねんきん定期便を配り、確認してもらい、定期便を見れば、今自分がどういう状況か確認で きることを知ってもらう。 加入期間、納付額、年金もらえる条件等を確認する。 ・各指導者が受講生の相談に乗り、質問を受ける。 4 振り返り ・各自感想を発表する
備考 講師感想など	年金の仕組みや制度についての説明は非常に難しく、事前準備の段階でかなり指導者間で議論した。その結果、加入している場合、未加入の場合のフローチャートを専門家の助言を受けながら苦労して作成し、日本の年金制度の仕組みと自身の現在の状況を知ってもらうことを重点に置いた。年金の仕組みの説明を受けるに従って、それぞれ個別に受講生が指導者に相談するようになり、年金への関心や、そして、日本で暮らし続ける場合の生活基盤についての思いを口にしていた。



○ 1月11日「介護」

日本語教室報告書	
授業日	2014年1月11日
授業テーマ	「年をとる」体験から「自分が年をとった時の生活」と「お年寄りを支える」を考える
授業の目標	・ 前回の「年をとる」疑似体験を振り返り、「自分が年をとった時の生活」と「お年寄りを支える」について考え、意見交換をすることで、参加者の相互理解を図る。
指導項目と内容	【授業の形態】 ・ 全体ディスカッション 受講生、指導者ともに輪になって、意見、考えを発表しあう。 担当指導者がファシリテーターになって意見を引き出す 【授業の内容】 1 導入 ・ 新年の挨拶、新年をどう過ごしたか、日本、母国での新年の過ごし方、習慣について 全員で紹介し合う 2 前回の振り返り ・ 前回学んだ日本語の振り返り 3 前回の「年をとる」体験を振り返る ・ 高齢者体験キットを体につけたときの体の変化や気持ちの有り様について感じたことを発表し、意見を言い合い、内容を深める。 4 「年をとる」疑似体験から「自分が年をとった時の生活」について考える ・ TV録画（支え合うことをテーマにした内容）視聴しながら、皆でディスカッション 5 「年をとる」疑似体験から「お年寄りを支える」を考える ・ DVD（地域での助け合いをテーマにした内容）視聴しながら皆でディスカッション 6 振り返り
備考 講師感想など	・ これまでの教室や前回の「年をとる」体験をしたことによって、受講生自身が自身の経験や父母など家族の様子を思い起こしながら、年をとることについて正面から向きあい、自分の気持ちを表現し始めていた。そこで、今回の教室では、「介護の実践」の内容を変更して、自分たちの思いを互いに語り合いながら、将来の生活を考え、自分の生活を振り返る時間とした。 ・ 日本人指導者、受講生を問わず、それぞれの状況や意見を話し合うことで、互いの立場や置かれている環境を理解し合い、信頼関係がより強まってきたと感じられた。



(10) 目標の達成状況・成果

生活者である外国人を対象とした日本語教室では、互いの理解と信頼関係を築くことが最も大切なことであることを実感できた今回の取組であった。当初から「教える」「教わる」関係ではなく、「互いに学び合う」ことをめざして、決して日本の制度や仕組みを押しつけないこと、各自の母国等の背景を十分に配慮しながら、日本で暮らしていくことをともに考える日本語教室として出発することを指導者間で確認していたが、回を追うごとに学習者の積極性や本気度が伝わってきた。最終回には、学習者たち自らがこれまで指導されてきた内容を寸劇的確に発表し、指導内容が定着していることを立証させてくれた。また、通訳を配置して制度や仕組み、習慣の理解をまず優先し、そののち必要な日本語を覚えるようにしたこと、指導者間で十分な指導内容の事前協議を行い、共有したこと、毎回の振り返り、評価を確実に行ったことによって、学習者の状況を把握し、適切な対応ができたことも、最後まで学習者の人数が減らなかった要因であると考えられる。

(11) 改善点について

日本で暮らす、特に高齢期に備えていくためには、日本の法律、制度、仕組み、習慣など多くのことを身につけていくことが必要であるが、特に定住外国人にとって必要となる基本的な知識とその知識を活用するための日本語教育を提供していきたいと考える。そのために、今回配慮したことは、指導者の中に定住外国人を加えたこと、事前に定住外国人へのヒアリング調査を実施したこと、それぞれの分野の専門家の協力を得たことなどであるが、次回以降さらに精度を上げて、準備を行うことが重要なポイントであると考えられる。

取組4 シンポジウムの実施

(1) 名称

平成26年度多文化共生国際シンポジウム

生まれ育った文化や社会が異なる仲間たちと考える「年をとる」—何が見えてきたのか

(2) 目的・目標

生まれ育った文化や社会が異なる人々がともに地域で暮らし働く環境づくりを目指して行った「ぐんまで迎える高齢期に備えるための地域日本語教室」について紹介しながら、人的多様性を活かした地域活性化のあり方を、地域関係者とともに考える。

(3) 対象者

行政、大学、国際交流協会、NPOをはじめとした日本語教育、多文化共生に関心をもつ方

(4) 開催日時

平成27年3月8日14:00～15:30

(5) 参加者

【養成ユニット履修生】坂本裕美、綿貫通啓、小林あけみ、正田江利子、【関係者・太田市】吉田桂子、【教室指導者】糸井昌信、糸井和子、松岡純子、【受講者代表】葛尾ネイデ、【学習者】ブラジル国籍(7人)【先生方】結城恵、山口和美、合計18人。

(6) 取組の具体的内容

「生まれ育った文化や社会が異なる仲間たちと考えた「年をとる」・・・何が見えてきたのか」をテーマに、地域日本語教室の実践とその実践の中から見えてきたものを紹介した。

- ・地域日本語教室の実施概要
- ・「防災」、「健康」、「年金」「介護」各担当指導者からの発表及び参加学習者、地域関係者からのコメント

(8) 受講者の募集方法

シンポジウムの開催周知用チラシを作成し、以下の機関や団体に設置／配布を依頼した。

- ・群馬県及び県内市町村の関係課県内の国際交流協会へチラシ送付
- ・県内外の多文化共生、日本語教育関係団体、関係者にチラシ配布及び電話、メール等での周知
- ・本事業参加者に対して周知依頼
- ・群馬大学HPに掲載

(9) 特徴的な活動風景

シンポジウムでは、日本語教室で「何を行ったか」ではなく、日本語教室を通して「何が見えてきたか」を各内容ごとに担当した指導者が発表した。さらにその発表について、日本語教室に参加した学習者の視点で、指導した専門家の視点でコメントをもらい、今回の日本語教室についての成果と課題について考えた。



(10) 目標の達成状況・成果

生活者としての日本語教育について、特に高齢期に備えるための日本語教育で、目指したこと、工夫したこと、実践したこと、そして見えてきたことなどを、本事業に参加し、関わった様々な立場の者が発表することによって、生活者としての日本語教育の一つの方向性を提示することができたと思う。シンポジウムの発表を行ううえで、教室の運営、内容等について振り返りができたことは、今後の事業のあり方について考えるうえで大きな意味があった。

(11) 改善点について

特になし

○取組5:「生活者としての外国人」のための地域日本語教育実践のための拠点と推進体制の整備に関する調査

(1) 体制整備に向けた取組の目標

(2) 取組内容

(3) 対象者

(4) 参加者の総数 7人

出身・国籍別内訳

中国	人	インドネシア	人
韓国	人	タイ	人
ブラジル	人	ペルー	1人
ベトナム	人	フィリピン	人
ネパール	人	日本	6人

(5) 開催時間数(回数) 時間 (全 6回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	内容	対応者
1	平成26年6月19日 10:00～13:00	3時間	太田市立宝泉小学校 太田市立九合小学校	結城恵・友成佐智子 2人	日本(2人)	対象地域の教育機関との連携(学校教育・社会教育機関)拠点と推進体制の整備に関する調査	文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業に係る対象地域の教育機関との連携(学校教育・社会教育機関)拠点と推進体制の整備に関するヒアリング調査を行った。	太田市立宝泉小学校及び 太田市立九合小学校 管理職及び教員
2	平成26年7月16日 11:00～17:00	6時間	太田市役所 大泉町役場	結城恵 1人	日本(1人)	対象地域の行政機関との連携を通しての、消防・保健・介護関係機関とのネットワーク構築に関する調査	文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業に係る日本語教室実施にあたり、今回の実施拠点となる太田市とその近隣の大泉町との関係者を訪問し、事業内容について説明するとともに、消防・保健・介護関係機関とのネットワーク構築に関する調査を行った。	太田市国際交流課 及び 大泉町国際協働課 担当者
3	平成27年2月14日 13:30～17:00	3.5時間	愛知県犬山市 犬山国際観光センター「フロイデ」	糸井昌信・糸井和子 2人	日本(2人)	他地域で実施している地域日本語教室の拠点と推進体制の整備に関する調査	愛知県犬山市・江南市・扶桑町との連携で推進する地域日本語教室の拠点と推進体制の整備に関する情報収集を行うとともに、本学が主催する地域日本語教室の取組を情報交換を行った。	NPO法人 シェイクハンズ・ 江南国際交流協会・ 扶桑町 多文化共生センター 関係者
4	平成27年2月15日 10:00～13:00	3時間	愛知県犬山市「シェイクハンズ」	糸井昌信・糸井和子 2人	日本(2人)	他地域で実施している地域日本語教室の拠点と推進体制の整備に関する調査	NPO法人シェイクハンズの地域日本語教室の拠点を視察し、学習者と指導者にヒアリング調査を実施した。本学が主催する地域日本語教室の取組を情報交換を行った。	NPO法人 シェイクハンズ 関係者
5	平成27年2月25日 13:00～16:00	3時間	キャンパスプラザ京都	結城恵 1人	日本(1人)	関係機関の連携を緊密に連携して地域活動を展開する先進事例に関する調査	地域日本語教育事業の拠点と推進体制の整備に参考となるネットワーキングの方法を先進事例より抽出するための調査を行った。	キャンパスプラザ 京都関係者

6	平成27年3月3日 13:30～16:30	3時間	愛知県豊田市役所 東庁舎5階 東51・52会議室	2人	ペルー (1人) 日本 (1人)	他地域で実施している日本語教室の拠点と推進体制の整備に関する調査	地域全体で取り組む日本語教室を核とした多文化共生社会づくりをめざす豊田市と名古屋大学の「連携」について情報収集をし、本学の事業の展開のあり方を検討する視点を調査した。	とよた日本語学習支援システム・名古屋大学・豊田市・豊田市国際交流協会等関係者
---	--------------------------	-----	--------------------------------	----	---------------------------	----------------------------------	---	--

(7) 参加者の募集方法

該当しない(本事業に関する教職員及び地域日本語教室指導者を派遣した)。

(8) 特徴的な活動風景(2～3回分)

群馬県においては、日本語教育関係団体の連携基盤が、他県と比べると弱く、その原因を調べたところ、数年前まで担当した群馬県国際交流協会の組織が変わり、引き継いだ群馬県観光物産国際交流協会の事業ではほとんど行われていないことが判明した。そこで、本事業でその充実を図るべく、他県の事例を調べて本事業の【取組5】の充実を図ることとした。特に参考としたのが次の2つの調査訪問である。

(1) 愛知県犬山市「シェイクハンズ」(2月14-15日)

愛知県犬山市・江南市・扶桑町との連携で推進する地域日本語教室の拠点と推進体制の整備に関する情報収集を行うとともに、本学が主催する地域日本語教室の取組を情報交換を行った。NPO法人シェイクハンズの地域日本語教室の拠点を視察し、学習者と指導者にヒアリング調査を実施した。本学が主催する地域日本語教室の取組を情報交換を行った。

(2) 名古屋大学・豊田市シンポジウム「日本語教育における「連携」を考える」(3月3日)

地域全体で取り組む日本語教室を核とした多文化共生社会づくりをめざす豊田市と名古屋大学の「連携」について情報収集をし、本学の事業の展開のあり方を検討する視点を調査した。

以上の調査の結果から、地域日本語教室における関係機関との「連携」には、「教える」「教わる」の立場を抜きにした、日本語教室に関わる誰もが「連携」「協働」することが本来のあり方であると考えられるが、関係機関と連携したところで、多文化共生の地域づくりは成功するわけではなく、外国人学習者を核とした「連携」を充実させる必要があり、この点についてはどの団体も課題があり、情報交換しながら検討を進めていく必要性を感じた。

(9) 取組の目標の達成状況・成果

地域日本語教室の目的は、外国人住民がその地域で暮らしやすくなることであり、そのために必要な生活知識や日本語を身につけてもらうものである。そこで必要となるのは、第一に、何を身につけてもらいたいのかを知る、第二に、外国人住民は何を必要としているのか、何を理解していないのかを知る、の2点に尽きることが判明した。日本語教育を行うものにとっては、この2点を熟知しているわけではない。そこで、様々な分野の関係者、専門家と協働して「何を身につけてもらいたいのか」を探るとともに、外国人住民とも十分なコミュニケーションをとって、「必要としているもの」を理解することが必要である。「連携」「協働」というと、ホスト側の「教える立場」の者が手を取り合って「教わる立場」を指導する様な印象を受けるが、多文化共生の地域づくりを目指すからには、「教える」「教わる」の立場を抜きにした、日本語教室に関わる誰もが「連携」「協働」することが本来のあり方であろう。そういう意味で、「相互理解」が地域日本語教育には必要なのだ再認識された。また、そうした連携・協働関係を構築するには、〈当該地域を熟知した〉地域日本語教室コーディネーターの存在が不可欠であることも再認識された。

これらの成果は、本年度の事業に反映し、関係機関との連携を地域を熟知した「多文化共生推進士」養成ユニット履修生にコーディネートに協力してもらうことで効果検証できた。また、教職員や履修生に、ブラジル・ペルー出身のバイリンガルがおり、これらの人材も地域の外国人住民のニーズを外国人住民の視点に立って理解・翻訳することができた。学習者の人数が減少することなく、教室を維持継続できたということもその効果を検証したこととなった。

6. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的

日本に定住を希望する外国人住民が高齢期に備えられるよう、学習者の文化的・社会的多様性に配慮した日本語教育プログラムを構築する。プログラムの構築にあたって、社会福祉、保健、介護、金融、企業等の関係者にその企画・実践の協力を得て、日本での高齢期に備える定住外国人を、産官学民が一体となって、「わかりやすく・伝わりやすい日本語」で支援する。

(2) 事業目的の達成状況

本事業の成果は、まず、多様な文化的・社会的背景をもつ学習者が継続的に参加できたかどうかにより検証した。次に学習内容面においては、第一に、学習者の文化的・社会的多様性に配慮することで、(a)学習者が、より高い関心をもって継続的に学習できたか、(b)その結果として自分が高齢期を迎える前に必要となる「ライフ・プラン」に関して、学習者が必要な情報を日本語で入手・立案・実践できるようになったか、を評価した。その結果を踏まえ、①学習者の学習の到達度、②指導者の指導能力、③開発した教材の効果の3つの視点から日本語教育プログラムを検証した。

その達成状況については、まず、学習者数の維持継続と言うことでは目標を達成することができた。通訳を配置して制度や仕組み、習慣の理解をまず優先し、そののち必要な日本語を覚えるようにしたこと、指導者間で十分な指導内容の事前協議を行い、共有したこと、毎回の振り返り、評価を確実に行ったことによって、学習者の状況を把握し、適切な対応ができたことも、最後まで学習者の人数が減らなかった要因であると考えられる。

学習内容については、毎回の授業の後の学習チェック、次の授業開始時の復習チェックを行い、学習者の学びの達成度と定着を図った。全員8割程度の正答率であり、最終回には、学習者たち自らがこれまで指導されてきた内容を寸劇的確に発表し、指導内容が定着していることを立証させてくれた。

本事業の推進にあたっては、太田市・みなかみ町・太田市消防署・味の素株式会社・日本ファイナンシャル協会群馬支部・NPO にいはるこども塾てまり・こでまり・でんでこ座三国太鼓・猿ヶ京活性化委員会との連携を実現し、本事業の企画・運営を円滑に進めることができた。また、栄養士・社会福祉士・介護福祉士・ファイナンシャルプランナー・運動指導士・消防士等専門職の方々に、必要な情報を提供頂けたことも本プログラムの質の向上につながった。

本事業の推進は、本地域日本語コーディネーター養成及び指導者養成において、資質向上を図る機会にも恵まれた。企画・運営推進者の結城恵は、平成26年度文化庁日本語コーディネーター研修で、本事業を「言語・文化の相互尊重」を前提とする日本語教育の構築という視点で検討し、その研修で得た実践関係者からの示唆を活用することができた。また、結城恵が併任する東京大学の学部・大学院生も地域日本語教室指導者として養成することができ、学部学生の田島志保はその成果を東京大学「グローバル・リーダー育成、スウェーデン研修プログラム」の一環で、3月10日にストックホルム大学で本事業の成果を英語で発表する機会を得た。さらに、本事業で地域日本語教室指導者の一員として参画した、群馬大学・群馬県「多文化共生推進士養成ユニット」履修生が、社会福祉法人さぼうと21が主催するシンポジウムにパネリストとして招聘されたり(平成27年1月18日開催)、文化看護学会第7回学術集会で本事業の成果に基づくワークショップを企画・実施を依頼されたりするなど(平成27年3月22日開催)、本事業の成果を普及するきっかけが生まれた。

(3) 地域における事業の効果、成果

本事業でとりあげたテーマである「防災」「健康」「介護」「年金」「お金」「年をとること」それぞれに、専門職の見方・考え方を知り、専門的な知識・技能を知ることができた。この事業は、これら専門職に対して、生まれ育った文化や社会が異なる場合に必要となる配慮が、多様な側面で必要であり、正確な知識を「わかりやすく伝える」ことの難しさと大切さを実感して頂く機会にもなった。本学では、今後も、「生活者としての外国人」が高齢期を迎えるにあたり、これら専門職及び専門機関と継続的に連携して、正確な知識をわかりやすく伝える工夫を啓発し実現していく予定である。

(4) 改善点、今後の課題について

日本で暮らす、特に高齢期に備えていくためには、日本の法律、制度、仕組み、習慣など多くのことを身につけていくことが必要であるが、特に定住外国人にとって必要となる基本的な知識とその知識を活用するための日本語教育を提供していきたいと考える。そのために、今回配慮したことは、指導者の中に定住外国人を加えたこと、事前に定住外国人へのヒアリング調査を実施したこと、それぞれの分野の専門家の協力を得たことなどであるが、次回以降さらに精度を上げて、準備を行うことが重要なポイントであると考えている。

また、今年度の事業では、学習者からが主体的に劇で成果発表をするという場面が生まれたが、今後はこの手法を活用し、一層の学習の定着を図っていきたい。

(5) その他参考資料

資料① 募集チラシ

資料② 地域日本語教室スケジュール表

資料③ 地域日本語教室指導者が招聘されたシンポジウム(主催 さぽうと21)

資料④ 地域日本語教室指導者が招聘された学会(主催 文化看護学会)